2024年(令和6年)3月31日

ほっかいどうNIE通信

Newspaper in Education

第105号

発行　北海道NIE推進協議会　〒060-8711　札幌市中央区大通西3丁目6　北海道新聞社内　☎011-210-5802　FAX011-210-5826

北海道新聞NIEホームページ(https://nie.hokkaido-np.co.jp/)でバックナンバーを閲覧できます

いっしょに読もう新聞コン

原さん（静内高静小）全国優秀賞

2023年度に行われた第14回「いっしょに読もう！新聞コンクール」（日本新聞協会主催）で、新ひだか町立高静小5年の原万琴さんが優秀賞に輝いた。小学生の最優秀賞は全国で1人、優秀賞は10人で道内からは原さんだけだった。馬に乗って坂を駆け上がる三重県桑名市の神事で、サラブレッドがけがをして安楽死処分になった記事を読んで応募した。「この問題をたくさんの人に知ってほしい」と、原さんは受賞を喜んでいる。

馬の命と伝統 問う

同コンクールは、小中高生と高専生が、昨年9月までの1年間の新聞から選んだ記事を読み、家族や友達らの意見も聞いて感想をまとめて応募した。全国と海外から5万9248編、道内から1339編が寄せられ、全国で個人への最優秀賞3編、優秀賞30編や優秀学校賞などが贈られた。

幼稚園の時から乗馬を習っている原さんは北海道新聞の「こども記者」として、引退した競走馬を取材し記事を書いたこともあった。新ひだか町で暮らし、馬は身近な存在だ。この記事によると安楽死処分になった馬も道内産とみられる。

読んだ直後の感想は「馬がかわいそう。なぜ馬の生命をかけてまで行うのか」と神事に否定的だったが、約700年間続く伝統の重みについて母親の意見を聞き、考え直した。

元々は豊作・凶作を占う目的だったが、今は見て楽しむイベントの色合いが強くなったことや、馬の体格の変遷などいろいろな視点から考えて「行事を誇りに思っている人たちもいる。昔の方法にこだわらず、坂の傾斜や馬が乗り越える壁の高さなどを見直すなど、馬の命と伝統の両方がかなう形になればいい」と結論を書いた。

今回の記事は母親から勧められて読んだ。受賞の知らせに「びっくりした。この記事に出ている事を多くの人に知ってもらえるのなら、すごくうれしい」と話す。

学校では、図工や家庭科など物を作る教科が特に好き。さらに作文を書くことや読書も好きだという。人体の仕組みに興味があって、将来はそうした分野の研究者になりたいというのが希望だ。

道内からは1人だけの優秀賞受賞者となり喜びを語る原万琴さん

富良野高に優秀学校賞

富良野高校は、本年度の「いっしょに読もう！新聞コンクール」で、全国15校が選ばれる優秀学校賞を初受賞した。道内校の同賞受賞は7年ぶり4校目。同校でNIEに取り組む北村智裕教諭（50）＝写真＝は「生徒たちの努力が評価された結果で、ありがたい。これを励みに応募を続けていきたい」と喜んでいる。

学校に対する表彰は優秀学校賞のほか、学校奨励賞もあり、今回は177校が選ばれている。同校からは2020年度に1年生約130人が夏休みの課題として初応募。21年度は2、3年生計200人ほど、22、23年度は1～3年生計300人が参加した。その結果、20年度から3年連続で学校奨励賞を受賞してきた。

ただ、応募数の多さだけが優秀学校賞の受賞理由ではない。北村教諭は「応募初年度の1年生の感想文には稚拙さがあった。その生徒たちが3年生になると、確実に感想文の質も向上した」と振り返る。

応募作品では、観光地の富良野だけに「観光関連の記事が多かった。そのほかコロナ禍やスポーツ、物価高騰といった記事の感想もあった」。このうち2年生の須藤詩さんは「10代女性に心の手当て」の記事（8月9日付北海道新聞朝刊）への感想で、北海道NIE推進協議会会長賞を受けた。

同校は21年度からNIE実践指定校となっている。朝学習の時間に新聞コラムを読んで短い感想文を書いたり、地歴公民の授業で毎月1回、生徒が政治、経済や環境問題の記事の要約と意見、感想を発表したりする。北海道新聞の記事を切り抜いて台紙に貼り、自らの考えを書き込む「新聞切り抜き作品コンテスト」にも参加。本年度の中村瑠愛さんを含め、これまでに生徒6人が優秀賞を受賞するなど、多彩なNIE活動を通じて新聞の情報を読み解く学びを深めている。

新聞に関わる取り組みについて北村教諭は「国語と英語、社会のほか、理科や家庭科、保健体育などにもNIEを広げて行きたい」と述べ、一層の拡充を願っている。

全道のアドバイザー10人と北海道NIE推進協議会関係者らが北海道新聞社本社の会場での対面式とZoomを通じたオンライン配信の併用型で実施した2023年度アドバイザー研修会

アドバイザー研修会で交流

記事DB活用法報告も

日本新聞協会が認定するNIEアドバイザーが、活動内容を話し合う2023年度の全道アドバイザー研修会が1月27日、札幌市中央区の北海道新聞本社で開かれた。過去3年は新型コロナウイルスの感染拡大でオンライン参加だけだったが、今回は会場に集まる対面との併用型で実施。アドバイザー10人、長年アドバイザーを務めたフェロー1人と、協議会関係者ら8人が参加した。

北海道NIE推進協議会が主催。アドバイザーは順に各地区セミナーや日常の活動について報告し、グループ交流と全体交流も行った。その中で「そもそも新聞とは何か知らない子が次々入学してくる。新聞という概念を形成する指導が必要」（小学校）、「昨夏のNIE全国大会の講演で、講師が今の子には熟考する時間が必要と語っていた。まさに新聞が向いている」（小学校）といった意見が寄せられた。

また、記事データベース（DB）の活用については「授業では複数紙の比較が基本なので、複数紙のデータベースを同時に使える仕組みがほしい」（高校）という要望や「意見文を書く授業で生徒にテーマを決めさせ、検索させて記事10本を読ませた」（中学校）などの報告も行われた。

さらに「NIEの基本的な実践法を新聞紙面で紹介できないか」（小学校）「新聞をこう使うと効果があるという実践法がパッケージとしてほしい」（小学校）など、NIEの普及に向けた提言もあった。

昨秋、3地区でセミナー

北海道NIE推進協議会は2023年10、11月、道内3地区でセミナーを開いた。このうち、日高管内日高町での日胆地区と函館市で実施した渡島地区は、会場での対面式とオンライン会議システムZoom（ズーム）の併用型、旭川市で開いた上川地区はオンラインのみで開催。各会場の参加者は、公開授業や実践発表を通じて新聞活用の工夫を学び、研究討議で各自の意見を交わした。

多様な働き方 記事を読み議論

日高・富川中

NIEの第17回日胆地区セミナーは10月18日、日高管内日高町の富川中で開かれた。公開授業では生徒たちが新聞記事を使って、よりよい働き方について考えを深めた。

日高NIE研究会との共催で、同管内の教員らを中心に約20人が参加した。同校の大嶋未央教諭が担当する3年生25人の社会科の授業＝写真＝を公開。在宅勤務などの多様化する働き方を解説した特集記事を読み、生徒がそれぞれの利点や欠点などの意見を出し合った。授業後の討議では参加者から「タブレット端末などを活用すれば、もっと効率的だったのでは」などの意見が出ていた。

活動の実践発表では、同町立厚賀小の大平真紀教諭が、新聞に親しむ取り組みを紹介。3・4年生の総合的な学習の時間で、児童が地元の自慢の産品などをPRする折り込みチラシ作りに挑戦し、実際に新聞に折り込んで配布して好評を得たことを報告した。

＝写真＝。上川管内の教員や大学生ら約40人が参加。新聞記事を活用する実践例を学び、効果的な活用法について意見を交わした。

上川・旭川NIE研究会との共催。旭川聾学校の脇渕昭平教諭が障害による困難を改善し、克服するための知識や態度を養う「自立活動」の授業で記事を活用した事例を紹介した。中学部の授業では、生徒5人が教育用記事データベースで聴覚障害に関する記事を検索。内容を要約した上で、自分の考えをまとめて発表した。

困難改善、克服へ 自立活動授業

旭川聾学校

第22回上川地区セミナーは11月9日、北海道新聞社旭川支社を拠点に開かれた

参加者からは「新聞と自立活動の親和性が高く、主体的に思考力を育んでいた」などの意見が出た。

また、旭川志峯高の井上陽介教頭は、大学受験で小論文の重要性が高まっていることを紹介した上で、指導に記事を活用した取り組みについて発表した。

医師不足やクマ 地域の課題探求

函館・南茅部中

第19回渡島地区セミナーが11月21日、北海道新聞社函館支社を拠点に開かれた＝写真＝。道内の学生や道内各地の教育関係者ら約30人が参加し「地方紙を読むことによって子どもたちが地域の身近な問題について、多面的な視点を養うのに役に立つのでは」といった意見を交わした。

函館市立南茅部中の武岡良教諭は「医師の不足」「地方公共団体の収入減少」「ヒグマの増加」といった具体的な政策課題を新聞から読み取り、地方自治が生活に密着していること、住民の権利や義務について考えさせる社会科の実践を紹介した。

函館市立亀田中の川端裕介主幹教諭は、同校が契約する新聞記事データベースの活用を紹介。函館市内の各学校では全国紙、地域紙3紙を購読しているが、生徒たちは学校から配布されたタブレット端末を通じて新聞データベースにアクセスし、理科や国語や保健体育の資料収集や、高校入試対策などにも積極的に利用していることなどを報告した。

NIE実践奮闘記

スピーチ資料に新聞／社会につながる学びへ

札幌市立もみじ台中教諭　佐藤　尋之

意見文を書くうえで「言いたい」ことがある話題を見つけることができれば、半分成功ではないかと思う。制限された字数の中で「言いたい」ことを表現することで思考力や表現力が試され、「言いたい」けれどうまく言えない気持ちがあるから、「どうしたらうまく表現できるだろう」という主体的な学びになると考えるからだ。

その点、新聞は身近なことから国際的なことまでさまざまなニュースを取り上げ、「今」の社会をリアルに感じられるものになっているので、生徒が意見を考えるうえでちょうどよい教材となっている。

3年生は、2年生のときに「根拠の適切さを考えて意見文を書く」という学習を通じて自分で新聞記事を選び、その記事の内容と自分の考えを相手に伝え、コメントをもらうという活動を行っている（「いっしょに読もう！新聞コンクール」への参加）。

この活動では、他者からコメントをもらうことで事実を多角的に見ることはできた。だが、意見と根拠のつながりをよく考えたり、自分の意見を深めたりする活動までできた生徒は一部だった。また、全国学力・学習状況調査において「自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くこと」を苦手としていることが分かった。

3年生では「説得力のある構成を考えよう～スピーチで社会に思いを届ける」という教材で、新聞記事を必ず資料として一つ以上取り上げる条件を付け、同級生に向けてのスピーチを行った。

生徒は渡された新聞に目を通し、社会の出来事に目を向けるとともに、総合デジタル教材「どうしん　まなｂｅｌｌ」を活用し、興味のある記事を探していった。「どうしん　まなｂｅｌｌ」では、キーワードや期間指定で記事を探すことができて大変便利だった。過去の記事にさかのぼって検索することができたし、時系列に沿って一つの話題を追うこともできた。

また、授業で新聞を扱うときには学校司書である嶋田智美さんの助けを借り、生徒が関心を持ちそうな記事を分類して集めてもらったり、記事探しの手伝いをしてもらったりもした。

スピーチはグループ内での発表の後、推敲して全体発表するという形式をとった。推敲するときに「今年の猛暑を伝えるためにはグラフの載ったこの記事がいいのではないか」と、説得力のある根拠を考える姿が見られ、そういう点でもキーワード検索や図表の有無を指定できる「どうしん　まなｂｅｌｌ」が役に立った。

「処理水海洋放出」について他の生徒の意見を聞くことで視野が広がったり、他の生徒のスピーチを聞いて発表の仕方を工夫したりする姿が見られ、スピーチの発表会は大変充実したものになった。

初めは話題を探すことに苦労したり、新聞の段組を理解できず内容を読むのに苦労したりしていた生徒が、新聞を広げ熱心に記事を読む姿が印象的だった。今回は「スピーチ」ということで、より社会性のあるテーマや生徒自身が問題意識をもったテーマを一人一人が選ぶことができた。

「スピーチで社会に思いを届ける」という題材で意見文を書いたが、個人的には、新聞を読むことで生徒の学びが日常や現実社会につながるきっかけになればという思いで取り組んでいる。テストや入試のための知識ではなく、世の中にある「素晴らしい取り組み」を知ること、「何でこんなことが起きるのか」という切実な問いをもつことが「学ぶ意味」につながったり、「進路（将来）」を考えることにつながったりすることを期待している。

時事研究の必要性強調

大学のＮＩＥ在り方議論

大学のＮＩＥを考える会が2月29日、北海道新聞社本社会場とオンライン配信の併用型で開催された。道内の大学、短大の教員と、主催した北海道ＮＩＥ推進協議会の菊池安吉会長らが参加。メディアリテラシー教育に新聞を活用した実践報告などを受け、より良い授業に向けた工夫について語り合った。

座長を務める北星学園大の阪井宏教授は、社会の動きに関する知識を「生きていく上で不可欠な栄養素」と位置づけて実施している時事社会研究の講義について報告した。この中で「選択的夫婦別姓」「出生前診断」など、論義の分かれるテーマで学生にグループディベートをさせた後、自分の考えをリポートにまとめさせているという。

オンラインも含めて大学・短大の教員らが参加し、授業での新聞活用などについて論義した「大学のＮＩＥを考える会」

札幌大の綱島洋一教授は「メディア情報を的確に読み解くスキルを身につけさせたい」と、メディアリテラシー教育に力を注ぐ。新聞、テレビ、雑誌だけでなくＳＮＳ上のニュースや話題を比較し読み解く授業を展開。ＳＮＳにより好みの情報ばかりが集中する「フィルターバブル」に陥りやすいことや、的確な情報にアクセスできるのは新聞記事だと気付かせる実践などについて紹介した。

教養教育における新聞活用について発表したのは北翔大の菊地達夫教授だ。保育に関する記事を例にキーワードの抽出や５Ｗ１Ｈを読み取り、保育行政の内容や課題を理解させる授業について解説した。

このほか「今、大学生に求められる資質・能力とＮＩＥ」（札幌国際大・大村勅夫准教授）「ＮＩＥの授業実践と大学のＮＩＥ」（道教大函館校・野嵜雄太講師）「『学習指導と学校図書館』における新聞記事データベースの試行」（藤女子大・三上久代非常勤講師）「大学の講義におけるＮＩＥの実践事例～北海道の経済開発への洞察とその批判的検証」（北海道情報大・福沢康弘教授）などをテーマとする報告もあった。

キャリア教育、生徒指導

人生に役立つ新聞活用を

北海道新聞社みらい教育推進室　小田島　玲（あきら）

筆者が出前授業で紹介し、中学生からの反応があった「悩みごとナビ」と「就活道」が載った北海道新聞の紙面

リレーエッセー　多紙彩々

ＮＩＥに取り組む先生方から「新聞自身がもっと新聞の良さを語って」と言われることがある。それを受けて考えた事を紹介する。

２０２２年８月に開かれた北海道ＮＩＥセミナーのパネル討論で、ＮＩＥアドバイザーを務める札幌南高の志田淳哉主幹教諭が「生徒指導に新聞を活用できないか。学校教育の究極の目標は良い社会人を育てること。悩みを持つ生徒は多い」と提言し、私も共感した。

授業の教材として記事を使ってもらうのはうれしいことだが、いろいろな記事を書き、さまざまな紙面を作ってきた経験からして、それだけだと少し寂しい。先生方にも子供たちにも「新聞にはもっといろいろあるよ」と呼びかけたい。

昨年10月、出前授業の講師として札幌市立平岡緑中を訪れた。総合的な学習の時間「職業講話～多様な職業人から生き方を学ぶ」で多様な職業の講師４人のうちの一人を務めた。

学校からは「単なる職業紹介ではなく、人生設計、働くことの喜びや難しさ、講師の人生そのものを話してほしい」との要望があった。私は新聞記者の仕事を説明し、私の経歴と仕事への思いを話したほか、北海道新聞の中高生向け記事を10本以上紹介した。たとえばいろいろな職業人を紹介する企画「仕事してます」、子供たちの悩みと回答を専門家に書いてもらう「悩みごとナビ」などだ。

生徒の感想は興味深かった。「自信を持ってやりたい事を言えなくても大丈夫と心に余裕ができた」「焦りがなくなった」という趣旨の感想が４人からあった。

意外にも就活中の大学生向けコラム「就活道～本当の自分はいない」に３人が反応した。心の中に「本当の自分」がいるわけでなく、家族の中の自分、アルバイト先の自分、学生生活の自分、全て自分だというコラムの内容に「面白かった」「悩みが解消され少し心が軽くなった」などと感想があり、「中学生はこんな事に反応するのか」と面白く感じた。

●まなbellで「仕事してます」+「職業名」で検索

臨床検査技師	警備員	客室乗務員	ゲームプログラマー	劇団俳優
ピアノ調律師	樹木医	動物看護師	自動車学校の指導員	司法書士
ラーメン店主	獣医師	雑誌編集者	ドクターヘリ機長	考古学者
盲導犬訓練士	通訳者	靴磨き職人	航空機副操縦士	果樹農家
水族館飼育員	薬剤師	救急救命士	コンテナクレーン運転士	花卉農家
動物園飼育員	税理士	和菓子職人	ラジオパーソナリティー	書店店員
自動車整備士	弁護士	生花店店員	オーナーパティシエ	パン職人
ホテル料理人	銀行員	介護福祉士	ホテルスタッフ	稲作農家
宅配便配達員	木工家	図書館司書	プロスキーヤー	歯科衛生士
気象予報士	酪農家	造園技術者	女子プロボウラー	管理栄養士
気象台職員	看護師	ホタテ漁師	トラック運転手	バスガイド
カメラマン	大工		ユーチューバー	美容師

学校からは「単なる職業紹介ではなく、人生設計、働くことの喜びや難しさ、講師の人生そのものを話してほしい」との要望があった。私は新聞記者の仕事を説明し、私の経歴と仕事への思いを話したほか、北海道新聞の中高生向け記事を10本以上紹介した。たとえばいろいろな職業人を紹介する企画「仕事してます」、子供たちの悩みと回答を専門家に書いてもらう「悩みごとナビ」などだ。

こうした中高生の心に触れるコーナーや、進路に役立つ記事こそ読んでほしいが、新聞を読み慣れていない人が探し出すのは難しい。そんな時は記事データベースを活用してほしい。

札幌市内の全ての小中学校には、記事データベースを搭載した総合デジタル教材「どうしん　まなｂｅｌ１」が導入されており、今回の出前授業で「仕事してます」で紹介している職業の一端＝表＝を示して「興味ある職業を検索してみて」と勧めた。「ゲームプログラマー」や「ユーチューバー」など新しい職業も取り上げている。

昨年８月の北海道ＮＩＥセミナーでも浦河高校が、キャリア教育で企業や大学を知るため記事データベースを活用していると報告があった。企業訪問だけではどんな企業か分からないのだそうだ。職業人にしろ企業にしろ、社会について正確でかつ俯瞰的に捉えた情報こそ新聞の特性であり、生かしていただきたい。

ＮＩＥに取り組んでいる先生方は、若い時から読者として新聞に親しんできた方が多いと思う。新聞が広く生活に役立ち、人生を豊かにすることを知ってくれているだろう。子どもが社会に出た時を視野に入れた新聞活用も試みてほしい。

深い学びの実現へ　学校図書館活用を　教育フォーラム

学校図書館の役割などについてオンラインで報告したＮＩＥ教育フォーラム

「学校図書館×新聞～主体的・対話的で深い学びの実現に向けて」をテーマとする第７回ＮＩＥ教育フォーラムが、オンラインで開かれた。学習指導要領が重視する情報活用能力の育成に向け、学校図書館が果たす役割について教育関係者らが意見を交わした。

日本新聞協会が主催し２月23日に開催。同協会ＮＩＥアドバイザーを務める副島江理子氏は「読書センター、情報センターとして図書館は学校生活の中心。司書教諭と学校司書が連携し、図書館を基盤とした学校経営を行ってほしい」と強調した。

東京都葛飾区教委の入山達也氏も「より多くの小中学生が本に親しみ、調べ学習などを支援できるよう、学校司書を統括する学校図書館コーディネーターを置いて一層の図書館活用を図っている」と報告。さらに大正大付属図書館長を務める稲井達也教授は「１階に児童書を置くなど、これからの大学図書館として地域社会の交流拠点を目指す」と述べた。

編集後記

○…2023年度の「いっしょに読もう！新聞コンクール」（日本新聞協会主催）で、富良野高が優秀学校賞に輝き、新ひだか町立高静小５年の原万琴さんが優秀賞を手にした。道内からの優秀賞受賞は、22年度に１年生で受賞した札幌・立命館慶祥小の重松遙真君に続いて２年連続だ。

○…作品は児童生徒が興味を持った記事を切り抜き、①選んだ理由と考えたこと、②家族や友人の意見、③話し合った後の自分の意見や提言―を書き込む。子どもたちが新聞を手に、社会の動きや課題について深く考え、言葉を紡いでくれたことがうれしい。23年度の道内応募数は1339編。24年度は一層の広がりに期待したい。　（福）